

令和4年度第4回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和5年3月23日（木） 午後3時～午後5時

■開催場所：京都市役所本庁舎4階 正庁の間

■議題：

「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について

■報告事項：

- （1）新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に係る新しい事業等
- （2）「まちづくり・お宝バンク」の令和4年度取組提案実績について

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員 8名

安委員、荒木委員、乾委員、篠原委員、菅谷委員、並木委員、森川委員、森実委員

■傍聴者：なし

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し、後日、音声配信を実施する。
Zoomを用いたWeb会議と併用開催した。

【議事内容】

1 開 会

2 議題 「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について

<森川座長>

・それでは、早速、議題に入る。「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について」事務局から説明をお願いする。

<事務局>

（資料1「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について」、
資料2「ロジックモデルを活用した第3期市民参加推進計画の進捗管理の方法について」
説明）

<森川座長>

・ロジックモデルの活用は難しい面も多いが、事務局から示された具体的な指標案の資料
に関してご質問等はあるか。

<森実委員>

- ・ 各施策に関して、当てはまる事業をすべて洗い出したことは意義があることである。しかし、細かくなればなるほど数量の変化を測るのは難しい。実際に使いながら、適切な指標や変化を測る期間を検討していく必要がある。

<森川座長>

- ・ 市民参加推進計画の各施策の成果の見える化は大切であるということは、共通認識である。

<荒木委員>

- ・ 長期、中期、短期のスパンで測ることについては、違和感がなかった。ただし、短期的な指標は目的化しやすく、それを防ぐための1年ごとにロジックモデルの指標を見直す機会等を設ける予定があるか聞きたい。

<事務局>

- ・ ロジックモデルを活用した進捗管理は、他都市でもあまり実施されていないが、市民参加推進フォーラムの委員の皆様からのご意見をいただきながら検討していきたい。

<並木委員>

- ・ 短期的アウトカムの指標を敢えて設定したことはチャレンジングなことである。変化を生み出したいことを短期アウトカムに設定しているため、変化を生み出すことが目的化するの正しい姿である。
- ・ しかし、変化ではなく、単に回数を重ねたことを成果に設定してしまうと、荒木委員の懸念のとおりになってしまう。今後、指標の設定の仕方が正しいか、本当に成果を反映しているかという部分をフォーラム委員の皆様にご意見いただくことで、ブラッシュアップできると考えている。

<荒木委員>

- ・ 今回の指標は、来年度から実験的に使ってみるものであると認識している。今後のフォーラム会議の中で、他に適切な指標があるかなどを検討する機会があれば良いと思う。

<安委員>

- ・ 短期アウトカムについて、5年平均の数値を指標にすることが妥当なのか疑問を持った。平均を取ることで、具体的にどの施策や事業が良かったのか見えにくくならないか。そこも含めて、指標を使っていく中で検討したい。

<森川座長>

- ・ 平均を取るか、細かく見るか、どちらの方が成果の評価として正確であるかについても、トライアルで使いながら検討するのか。

<事務局>

- ・ 使いながらブラッシュアップしたいと考えている。

<並木委員>

- ・ 中期アウトカムを測る指標として市政総合アンケートの回答を設定されており、現時点では各問いを満遍なく割り振っているが、問いの解釈によっては、複数の施策を評価するものとして使えると考えられる。

<事務局>

- ・ 並木委員がおっしゃるとおり、1つの問いが複数の「重視する視点」を評価するものとして使える可能性があるため、工夫を重ねていきたい。

<森川座長>

- ・ 市政総合アンケートや市民生活実感調査は、毎年実施されているのか。

<事務局>

- ・ 市政総合アンケートは5年に1回である。前回は、第3期市民参加推進計画を策定する際に実施しており、フォーラム委員の皆様にもアンケートの設問についてもご意見をいただいた。
- ・ 市民生活実感調査は、京都市基本計画の進捗管理するものとして毎年実施している。政策ごとに調査を行っているが、市民参加の分野はそれらに横串をさすものだと考えている。複数の設問の回答を指標に設定することで、市民参加の進捗が測れるように工夫している。

<森川座長>

- ・ まとめると、論点の1つは、指標をとらえる期間設定の妥当性である。問題はないか。

<乾副座長>

- ・ 10年ごとに測る長期アウトカムは、大きな目標の達成度を測るものとして良いと思う。5年の中期アウトカムについて、市政総合アンケートが必要なタイミングに確実に実施されるのか確認しておきたい。

<事務局>

- ・ 市政総合アンケートの次回の実施予定は、令和6年度である。

<乾副座長>

- ・ 問いの細かい文言を見直すことや、設問を追加することは可能なのか。

<事務局>

- ・ 前日も市民参加推進フォーラム委員の皆様にご議論いただいている。令和6年度も同様にご議論をお願いすることになると考えている。

<乾副座長>

- ・ アンケートを作成する段階で、指標も改めて見直す必要があると思う。来年度は、アンケート項目も視野に入れて、指標の妥当性を検討したい。

<荒木委員>

- ・ 今回の指標は、既存のアンケートの質問内容に苦勞して結び付けているように見受けられるものもあるため、アンケート項目を指標の内容寄りに見直すことは必須であると思う。

<森川座長>

- ・ 論点の2つ目として、資料2の評価の全体像について、ご意見はあるか。

<並木委員>

- ・ 現行の計画をロジックモデルに当てはめることで、難しさが生じている。例えば、「重視する視点2」を実現するための施策として、1, 7, 9, 11, 12がある。しかし、これらの施策は実際には他の重視する視点にも影響を及ぼすような要素がある。したがって、中期アウトカムで「重視する視点2」はあまり伸びていないという評価になった場合、各施策のそれぞれの良かった部分が見えなくなってしまう懸念があるため、個別の施策でどこが特に伸びたのかという部分も見たうえで、中期アウトカム全体の評価を検討する必要がある。

<森川座長>

- ・ 第3期市民参加推進計画を策定する際の議論でも、3つの「重視する視点」は13の施策に横串をさすものとして設定されていた。たしかに、事務局からの当初の説明でも、施策によって濃淡があるため、今回は、関わりが濃いものを紐づけているという説明があったように思う。

- ・ 資料２の枠組みだけでは見落としてしまう部分を気にしておく必要がある。

<並木委員>

- ・ 現行の計画では仕方がないが、次期計画ではロジックモデルに当てはめやすいように改善し、当面は過渡期の対応という扱いにすればどうか。

<森川座長>

- ・ ロジックモデルに当てはめる今回の計画の進捗管理をブラッシュアップすることは、次期計画の施策体系等を検討する材料になるか。

<事務局>

- ・ 未定ではあるが、次期計画の土台になれば良いと思う。

<乾副座長>

- ・ 施策７については、昨年度に部会に分かれて議論していた「高校生への市民参加の裾野拡大」の取組があてはまると考えている。どのような変化を期待して取り組んでいるのかということを指標にしても良いと思う。

<森川座長>

- ・ 昨年度は部会に分かれて、今年度は全体会議で議論を進めてきた部分である。乾副座長からご提案をいただいたが、ご意見はあるか。
- ・ どのように学校の先生を支援し、生徒の学びにつなげるかという「質」の部分を議論してきた印象である。短期で測るか、長期で測るかについても検討が必要である。

<荒木委員>

- ・ 直接の市政参加ではなく、高校との連携授業がどれだけ導入されたかというような、市政参加に興味を持つきっかけの場づくりの数を指標にできないか。

<安委員>

- ・ 授業の参加者数だけで市民参加の実態が測れるのかは不明である。本当は、授業の受講者に、今後どのように市政に関わっていきたいかという心境の変化を聞くことができれば良いと思う。短期アウトカムがいかに実態に合うかという部分は施策７に限らず考えたい部分である。

<森川座長>

- ・ 資料2の短期アウトカムの施策2の例示で、質的な評価のためのサンプリング調査と記載されているが、具体的な想定はあるか。

<事務局>

- ・ 第2期の計画を進める中で、市民参加推進フォーラムの委員の皆様にもご協力いただき、青少年活動センター等にインタビューやアンケートを実施した。そのような調査も参考になると考えている。

<森実委員>

- ・ 来年度にでも、既存のアンケート回答の変化を追ってみることで、本当に評価につながる変化の結果が得られるのか検証しても良いのではないか。

<乾副座長>

- ・ 短期アウトカムの数値が上がることばかり考えると、上がりやすい指標ばかり探してしまう傾向になる。しかし、既に取り組が進んでいる分野もあり、それは「できている」という評価から始めればよいだけである。
- ・ 次年度は、実態の把握も含めて、指標を使ってみる1年にすればよいと思う。

<森川座長>

- ・ 確かに、市民参加の裾野拡大を高校生対象にすることに決めた際、既に大学生では多く取組を実施しているという委員の感覚的なものを根拠にして決定した。それも根拠が薄かったと思われるので、指標を作ってしっかりと実態を把握し、評価できるようになるとよい。

<安委員>

- ・ 先ほどの発言と違う内容になってしまうが、授業の受講者数を1年ごとに見る短期アウトカムに設定することは、分かりやすく実態を表すものとして良いと感じた。また、中期アウトカムでより質的なものが見えてくるのかと思う。

<篠原副座長>

- ・ 乾副座長にお聞きしたい。施策7の短期アウトカムについて、1つの市政参加として、選挙の投票という行動もあると思うが、それは指標にはならないのか。

<乾副座長>

- ・ 理想的で重要なアウトカムであると思う。そのためには、インプットとしてシチズンシップ教育の実施や啓発等の施策を設定しておき、インプットに対する効果を測れば良いと思う。

<篠原副座長>

- ・ 高校生にとって、自分が社会とつながっているということが最も分かりやすいことの1つが、選挙行動である。

<荒木委員>

- ・ まさにその通りであると思う。若い世代をどこまで含めるかということも考えなければならない。特にシチズンシップ教育を受けている世代は、既に少し投票率が高く、その上の世代の20代の方が低い傾向にある。もし含められるのであれば、現在の20代なども対象に検証することができれば良いのではないかな。

<安委員>

- ・ 1つの施策の評価をするために取組が2〜3つ、その取組に対してアウトプットが1つ、アウトカムが1つ設定されているが、そのように設定するものなのか。

<並木委員>

- ・ これはイレギュラーなタイプである。基本的には、いくつかの取組、あるいはいくつかの施策を実施した結果として1つの変化を生み出すことを目標に作るのが一般的である。
- ・ 次の計画を作る際には、このような形で評価することを前提に作ればよいと思うが、現行の計画では、整合性を取るために1つずつ紐づける形にしている。

<事務局>

- ・ この指標が取れるかどうかということも踏まえて作成したため、取組とアウトプットとアウトカムが1対1対1の関係になっている。

<安委員>

- ・ 見やすいといえば見やすいと思う。計画には記載されていない、様々な取組も出てくる可能性があるかと理解した。

<並木委員>

- ・ 1つの方法として、短期アウトカムの設定をやめて、アウトプットに集約することも可能である。その上で、中期アウトカムに選挙の投票率の変化などが出てくるという方法で見えていくこともできると思う。

<森川座長>

- ・ 目先の目的としては、第4期計画の策定に向けてこの指標を用いて、第3期計画の進捗を評価し、次期計画に役立てることである。第2期計画から第3期計画への議論の中では、京都市は市民参加の先進都市ではないかという話になっていた。その中で、パブリック・コメントの意見数が多いことや、市民公募委員が多いことが形だけではいけないという議論になり、第3期計画では対話や取組の質の向上を重視することになった。
- ・ 同様に第3期計画から第4期計画に向けては、質の評価という部分は必要なものである。代表的な取組をピックアップして評価することは可能か。

<森実委員>

- ・ すべてを評価するのは難しい。いくつかの取組を取り上げる方法が良いと思う。

<森川座長>

- ・ 労力の問題もあるため、できることとできないことを見極めながら進めていけると良いと思う。

<並木委員>

- ・ 労力的にどこまでできるか見極めながら、定量的な評価とは別に個々の取組の検証も併せて実施する必要がある。

<乾副座長>

- ・ 今回の指標で確定ではなく、より精緻化していくことが次年度の作業になると思う。

<森実委員>

- ・ そのとおりではあるが、自分は記者であるため、その立場として記事を書くとなると、議論されている評価方法はかなり難しい印象を受ける。せっかく評価した内容を市民にも理解してもらうためには、わかりやすい方法・言葉で評価できるように工夫してほしい。

＜安委員＞

- ・ 京都市が評価しながら進めている取組を市民にもっと知ってもらうことは重要である。そのために計画も分かりやすい言葉でつくられていると思うので、評価もそれにならえると良いと思う。

＜菅谷委員＞

- ・ 地域の人間としては、頑張って取り組んできたつもりであるが、実際に地域で起こっていることは、行政に任せればよいと考え、一緒にやろうという人がおらずコミュニティが縮小していることである。ロジックモデルの中で、これらの課題改善に関する評価が、現場での取組の変化にも表れるのかどうかを 意識する必要があるのではないか。

3 報告事項

報告事項（１）新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関する新しい事業等

＜事務局＞

（資料３「新たに設置された附属機関等に係る市民協働政策推進室の協議結果（一覧）」、
資料４「市民参加に関する新しい事業や取組」報告）

＜乾副座長＞

- ・ １つ目の地球温暖化対策室の新しい取組について、連携先の企業に大学の学生約１０名をインターンシップ生として受け入れてもらうことになっている。今後、学生もまちづくり通貨に関する取組に関わることになると思う。

＜菅谷委員＞

- ・ 新規の附属機関等の１つ目は、自分自身の地域の話である。地域としては、伝統的な取組をされているところに活用してもらいたいと思っており、長らく教育委員会と協議してきた。ようやく具体化して動き始めたものであり、楽しみにしている。

報告事項（２）「まちづくり・お宝バンク」の令和４年度取組提案実績について

＜事務局＞

（資料５「まちづくりお宝バンク実績（令和４年度）」報告）

＜森川座長＞

- ・ 最後に、今年度末で任期が終了となる委員から一言ずついただきたい。

<安委員>

- ・ 2年間とても貴重な経験をさせていただいた。市民参加フォーラムに参加して、人や社会とのつながりに改めて気づき、興味を持って NPO のボランティア等に参加するようになった。これまで、学校でも自分の力で社会や未来を変えるという経験をしてこなかったため、一番の収穫であった。来年度からは大学院に進学することになっており、市民参加推進フォーラムで得た経験や視点をいかしていきたいと思う。

<菅谷委員>

- ・ 6年間、市民参加推進フォーラムに参加させていただいた。自分自身、ずっと地域の人間であり、井の中の蛙であると思っているため、このような議論の場に参加することで、新たな視点を持つことができた。これをどのように後の世代の人に伝えていくかということが自分の役割であると思っている。ありがとうございました。

4 閉会

<事務局>

今年度の会議はこれで終了となる。次年度も引き続きよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

以上